

## リベルタン文学とフランス革命

関谷一彦

### 論文要約

申請論文『リベルタン文学とフランス革命』は、2019年3月、関西学院大学出版会発行の拙著『リベルタン文学とフランス革命——リベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか？——』に基づいている。

本論のテーマをもっともわかりやすく説明しているのは、拙著副題の「リベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか？」である。このテーマは、歴史学で議論となった「フランス革命の起源」の問題と深く結びついている。モルネが提起し、ダーントンが発展的に修正し、シャルチエが疑問を投げかけた歴史学の伝統的な問題である。本論では、歴史学上の議論を踏まえながら、リベルタン文学に焦点を絞ってフランス革命への影響を考えている。一言で言えば、「フランス革命の起源」の問題を文学的にアプローチしようとする試みである。各章の内容を要約すると、以下のとおりである。

第一章では何がフランス革命を引き起こしたのかという「フランス革命の起源」の問題を、歴史家たちの議論を振り返りながら概観する。ダニエル・モルネは、『フランス革命の知的起源』（1933年）で、「知性が革命の準備にどのような役割を果たしたのか？」と問い、「フランス革命を決定したのは、部分的には、思想である」と結論づけた。モルネの表現は婉曲であるが、啓蒙思想がなければ、フランス革命はこれほど急速には起こらなかったと考えている。ロバート・ダーントンは、非合法文学が当時のベストセラーであったことに注目する。ダーントンの結論は、「哲学書」は、世界を転覆させることを大声で求め、1789年を準備したというものであった。それに対してロジェ・シャルチエは、「哲学書」の結果フランス革命が起こったのではなく、君主や王政や旧来の秩序に対する人心の離反は、哲学書の成功の条件だと言う。つまり、啓蒙思想がフランス革命を導いたのではなく、フランス革命が啓蒙思想を創り出したと主張する。ダーントンとシャルチエの議論は、フランス革命は「哲学書」の結果か条件かという歴史学上の問題を浮かび上がらせているが、迷路への入り口でもある。

第二章ではリベルタン文学とは何かを考える。「リベルタン」という語の語源はラテン語の *libertinus*（解放奴隷の子）であるが、17世紀にはキリスト教の正統な考えにとらわれない「自由思想家」を意味し、18世紀には性のモラルを逸脱した「放蕩者」に意味を変えていく。こうした変遷から読み取れるのは、「逸脱」と「反逆性」である。したがって、リベルタン文学は、「性」と「反逆性」を含みもつ「性を内包した、反逆的な文学」と定義できる。またこの章では、リベルタン文学が開花する背景についても、ヴァトー、ブシェ、フラゴナールなどの絵画を通して考える。こうした分析からわかるのは、フランス18世紀は「哲学の世紀」と同時に「快樂の世紀」でもあることだ。

第三章では「リベルタン文学の始まり」をクレビヨン・フィスの『ソファ』と、ディドロ

の『不謹慎な宝石たち』を中心にしてみる。クレビヨン・フィスの『ソファ』(1740、1742)も、ディドロの『不謹慎な宝石たち』(1748)も、「貞潔な女性」を探すという「性」と「慣習」がテーマである。18世紀前半に生きる女性たちにとって重要なのは、慣習に従って生きることであった。当時の女性にとって慣習は疑うものではなく、従うものであり、見かけこそが重要で、見かけを取り繕うことが重要であった。『ソファ』も『不謹慎な宝石たち』も、慣習に従って生きようとする女性たちを批判しており、そこには偽善を暴こうとする意志が読み取れる。

第四章はおそらく18世紀の読者がもっとも猥褻な作品と考えていた『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B\*\*\*の物語』(1741、以下『ドン・B\*\*\*の物語』と略す)を取り上げる。主人公サテュルナンの性の遍歴を物語内容とするこの作品は、18世紀フランスのベストセラーの一つであるが、読者がまず惹きつけられたのは「性」の記述であっただろう。ここには、現在のポルノ文学に通じる要素がある。しかし、『ドン・B\*\*\*の物語』には、「性」の記述だけではなく、キリスト教モラルに対する過激な挑発が描かれている。「貞潔は絵空事でしかなく、女性を抑圧する、囚われの身を表す言葉」でしかないと考えた修道女モニックが、真実として信じるのは自分の「心の声」だけである。モニックは、「心の声」として「性」的欲望を見出したが、ここで重要なのは世界を疑問に付すこと、自分の「心の声」だけを信じることであり、啓蒙を实践する登場人物が描かれている。また、『ドン・B\*\*\*の物語』には、聖職者の性的欲望が描かれていて、「教会の腐敗」をイメージさせる。ここには、性を通した痛烈なキリスト教モラル批判が読み取れる。当局が血眼になって作者を捜し、回収しようとしたこの作品は、しかしながら宮廷にまで闖入していた。

第五章ではリベルタン文学の中でももっともよく読まれたと思われる『女哲学者テレーズ』(1748、以下『テレーズ』)に焦点を当てる。『テレーズ』は、実際にあった事件をもとに構想された作品である。ジラルル神父が告解者のカディエールを惑わして強姦し、墮胎させたこの事件(1731)は、ヨーロッパ中でスキャンダルになった。その「カディエール Cadière とジラルル Girard の訴訟」から『テレーズ』の副題である「ディラグ Dirrag 神父とエラディス Eradice 嬢の物語」が生まれた(カディエール Cadière のアナグラムがエラディス Eradice、ジラルル Girard のアナグラムがディラグ Dirrag 神父)。この作品も、「性」が描かれているだけでなく、「性」の描写と「哲学」的な議論が交互に記述されている。『テレーズ』にみられる哲学的議論の核心は、「すべては必然であり、無から結果は生まれることはない。またわれわれには選択の自由はない」という機械論的、決定論的な考え方である。しかし、世界の創造主としての神の肯定と宗教の否定、さらには唯物論と神の肯定という矛盾がみられる。

また『テレーズ』では、「仮想の読者」という文学的アプローチを行った。つまり、「暗黙の作者」が思い描く「暗黙の読者」＝「仮想の読者」がどのように『テレーズ』を読んだのかを考えようとした。それは、「暗黙の作者」＝「C夫人とT神父」が、テレーズ＝「暗黙

の読者」を教化したい主題のなかに読み取れる。ここから導き出せる「仮想の読者」にもっとも伝えたいことは、「道徳」、「宗教」、「哲学」、つまり「道徳」：性的モラルの批判、「宗教」：宗教は人間が創り出したもの、「哲学」：決定論的、機械論的な考え方である。それは言い換えれば、「仮想の読者」の関心でもあり、1) 性的描写、2) 宗教は人為的で政治と結びついている、3) 決定論的、機械論的な考え方と唯物論的な考え方というわけだ。

第六章はマリー=アントワネットを攻撃した「政治的中傷パンフレット」を取り上げる。「政治的中傷パンフレット」は、1770年代に入って増加し、1790年頃にピークを迎える。本章で取り上げるのは、『シャルロとトワネットの恋』(1779)と、『ルイ十六世の妻であるマリー=アントワネットの色情狂』(1791)の二つのパンフレットで、両者を比較することで、中傷がどのように変化したのか、その変化に何が読み取れるのかを考える。『シャルロとトワネットの恋』で描かれているのは、性的不能のルイ16世、性欲が満たされないマリー=アントワネット、マリー=アントワネットとアルトワ伯爵との不倫であり、「性」が笑いを誘いながら滑稽に描かれている。それに対して『ルイ十六世の妻であるマリー=アントワネットの色情狂』は、タイトルに見られるようにマリー=アントワネットを「色情狂」としてより過激に描いている。しかも最後は、彼女の振る舞いを国家の「悪事」として政治的に断罪している。ここには、笑いを含んだ「中傷パンフレット」から政治的攻撃を目的とする「政治的パンフレット」への変質が読み取れる。しかし、見逃してはならないのは、こうした批判はキリスト教モラルに基づく批判であり、その点ではキリスト教モラルを批判するリベルタン文学と異なっている点である

第七章はフランス革命中に書かれたパンフレット「フランス人よ、共和主義者になりたければあと一息だ」(以下「フランス人よ」)を含むサドの『閨房哲学』(1795)の思想の流れに焦点を当てる。サドの諸作品は、リベルタン文学の終着点である。その理由は、「性を内包した、反逆的な文学」がこれ以降廃れていくからである。キリスト教を批判し、そのモラルを断罪し、王権をも徹底的に攻撃するサドのテキストは、リベルタンという語がもつ「反逆性」を見事に体現しており、その過激さに肩を並べる作品を以後見出すことはできず、また反逆性とともな「性と哲学」が一体化されたテキストも見当たらない。本章で取り上げる『閨房哲学』は革命中に執筆された作品であり、本文中に挿入された「フランス人よ」というパンフレットはサドの「哲学」をよく表している。したがって、『閨房哲学』に流れ込んでいる思想を分析することによって、サドの思想系譜を明らかにすることができる。ここでは、名前が明示されている人物たちとして、ルソー、ヴォルテール、ビュフォンを取り上げ、名前が明示されていない人物たちとして、ドルバック、モンテスキュー、ホブズを取り上げる。また、サドのテキストはリベルタン文学の系譜の中に位置づけられること、さらには『テレーズ』と『閨房哲学』の類似を明らかにして、『テレーズ』からの影響も指摘した。

第八章ではこれまであまり紹介されてこなかった「リベルタン版画」について見てみる。とりわけ同時代に日本で発達した「春画」と比較しながら検討する。性愛を描いた絵画や版

画の歴史は、ヨーロッパではその起源をルネッサンス、さらには古代ギリシアやローマにまで遡ることができる。一方、日本の春画の歴史も古く、もっとも古いものとして平安時代末期から鎌倉時代にかけて描かれたといわれる三つの絵巻物が残っている。こうした絵巻物はやがて浮世絵春画に取って代わられることになり、呼称はさまざまだが「春画」という一つのジャンルを生み出した点に、挿絵版画として発達した「リベルタン版画」との違いを見ることができる。18世紀フランスの「リベルタン版画」は、「性」を露骨に表したのものから暗示的に表現したものまで、その内容は多様であり、呼称も異なっている。こうした差異を認めながらも、「リベルタン版画」と「春画」に共通しているのは「視覚の重要性」である。視覚はエロティシズムを生み出す重要な要素であり、本章では春信と歌麿の春画を具体例にして取り上げている。また、「リベルタン版画」と「春画」の独自性を『テレーズ』の挿絵を中心に比較検討する。そこからは、日仏のエロティックな版画の独自性が浮かび上がるだろう。

第九章ではこれまでの分析を踏まえて、「リベルタン文学」、「リベルタン版画」が果たした役割について考える。「リベルタン文学」は、性欲を掻き立てることのみを目的としたポルノグラフィとは違って、その定義で見たように、「リベルタン」という語がもつ歴史的概念形成において、本来的に反逆的であり、内面を支配するキリスト教モラルを批判するという役割をもっている。18世紀では、読者層も広がるとともにすでに変質し、公衆が誕生していた。リベルタン文学は、「性と哲学」を結びつけることによって公衆の怒りに論理を与えるとともに、公衆の欲望に受容されやすい形式であった。

「リベルタン版画」の果たした一番の役割は、読者（鑑賞者）の性的欲望を掻き立てることであったが、「リベルタン版画」も、『テレーズ』に見られるように性を通してキリスト教、教会を批判する役割を果たしている。また、「リベルタン版画」は、19世紀に始まる性を消費するという意味での現代的ポルノグラフィへの道を準備した。

「リベルタン文学」や「リベルタン版画」の批判が「性」と結びつく背景には、キリスト教の教えと現実認識との乖離がある。また、即物的で現実的な肉体的快楽は、唯物論哲学とも結びつくことになる。こうした経緯はフランス語の「フィジック (physique)」という形容詞の意味の変遷と結びついている。17世紀のリベルタンと18世紀のリベルタンの反逆の矛先はキリスト教であり、反宗教思想が問題にするのは、神の存在である。神の存在についての懐疑は、当然のことながらキリスト教が説くあの世の存在を疑問に付す。また魂の未来永劫不滅という考えも疑問となる。宗教に対する疑問は、さらに現実に対する疑問を導くことになる。宗教が支配者の道具であるという考えに見られるように、視点は支配のあり方、社会の制度へと移っていく。そこで問題になるのは、現世の幸福であり、「今、ここでの幸福」である。

性的快楽がもたらす「今、ここでの幸福」は、観念的なあの世の幸福よりも、この世の幸福を実感させ、現実に向けさせる要素を含んでいる。また、宗教が生まれたのは、文化的、社会的、とりわけ政治的強制の結果であり、宗教の起源は政治家のペテンであるとする

考えは、宗教批判を政治批判へと向かわせる思想を内在している。18世紀の後半に反宗教的な考えが、政治批判へと現実に向かっていった背景に、リベルタン思想、リベルタン文学が果たした役割を見逃すことはできない。さらには、個人という意識による批判も見逃すことはできない。性的快楽は個人的快楽であり、相手の快楽は想像できても、快楽そのものは個人にしか感じ取れない。したがって、「性」は個人を意識させる。自分が個別な存在であり、独自の快楽を感じ取る存在であることを「性」は教えてくれる。個人の幸福を妨げるものに対する批判意識は、「孤立主義」を主張するサドの言葉によく表れている。

では、なぜリベルタン文学は18世紀フランスに生まれたのか？ 18世紀にはリベルタン文学が生まれる条件が揃っていた。時代の雰囲気、キリスト教への懐疑、教権批判がリベルタン文学開花の背景にある。聖職者によるスキャンダル、イエズス会とジャンセニストとの対立、宗教的弾圧に対する反発、こうした教権の綻びがリベルタン文学を生み出した背景にある。快楽と理性は一見すると相容れないが、数量化される欲望が人間の行為を決めるというテレーズの哲学においては、欲望することと哲学することは矛盾なく共存している。したがって、「リベルタン文学」は、啓蒙の世紀の特徴である「快楽」と「理性」の結びつきをよく示している。また「性」は、人間を剥き出しにして、うわべを剥ぎ取り、羞恥心さえも剥ぎ取ってしまう。取り繕った偽善を、「不謹慎な宝石たち」が暴露するように、明らかにしてしまうという役割をもっている。隠すべきものを剥ぎ取られた裸体は、あるがままの現実を見せてくれる。「性」のもつこうした役割こそ、「現実批判」の力となりうるものであろう。

結論では本書の副題である「リベルタン文学はフランス革命に影響を与えたか？」に答える。本論で重要なのは「読書の問題」であり、「仮想の読者」という試みを取り入れた。読書は「個人」という意識を生み出し、「個人」である一読者は公衆を生み出す。第五章で「仮想の読者」の関心が「道徳、宗教、哲学」であったように、当時の公衆の関心もまた「道徳、宗教、哲学」にあっただろう。こうした点から、リベルタン文学のフランス革命への直接的な影響を指摘することは難しいが、間接的な影響は間違いなくあったと言えるだろうというのが結論である。

本論からはさらに新たな疑問として、権力はなぜ「性」をいつの時代においても取り締まるのか、また「性」と「笑い」の結びつきも指摘しておきたい。

本論の構成は以下のとおりである。

## 序論

### 第一章 「フランス革命の起源」の問題

- 1) ダニエル・モルネ
- 2) ロバート・ダーントン

- 3) ロジェ・シャルチエ

## 第二章 リベルタン文学とは何か？

- 1) 「リベルタン」という語の変遷
- 2) リベルタン文学の定義
- 3) リベルタン文学が開花する背景

## 第三章 リベルタン文学の始まり

- 1) クレピヨン・フィスの『ソファ』
- 2) デイドロの『不謹慎な宝石たち』
- 3) 偽善を暴こうとする意志

## 第四章 『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B\*\*\*の物語』

- 1) 読者が惹きつけられ「性」の記述
- 2) 真実なのは「心の声」
- 3) 聖職者の性的欲望

## 第五章 『女哲学者テレーズ』

- 1) 物語の概要とその周辺
- 2) 『テレーズ』にみられる哲学
- 3) 「仮想の読者」というアプローチ
- 4) 『女哲学者テレーズ』の読み
  - 4-1) 読者層
  - 4-2) 「暗黙の作者」が示す主題
  - 4-3) 道徳、宗教、哲学
  - 4-4) 「仮想の読者」の関心

## 第六章 政治的中傷パンフレット

- 1) パンフレットの世界
- 2) 政治的中傷パンフレット『シャルロとトワネットの恋』、1779年
- 3) 『ルイ十六世の妻であるマリー=アントワネットの色情狂』、1791年

## 第七章 『閨房哲学』とフランス革命

- 1) リベルタン文学の終着点としてのサド
- 2) 革命中に執筆された『閨房哲学』
- 3) 「フランス人よ」のパンフレット

- 4) 『閨房哲学』に流れ込んでいる思想
  - 4-1) 名前が明示されている人物たち
  - 4-2) 名前が明示されていない人物たち
- 5) リベルタン文学の系譜
- 6) 『テレーズ』と『閨房哲学』の類似

## 第八章 リベルタン版画

- 1) 性愛を描いた版画の歴史
- 2) 用語の問題
- 3) 視覚の重要性
- 4) 『テレーズ』の挿絵の特徴
- 5) 日仏エロティックな版画の独自性

## 第九章 リベルタン文学、リベルタン版画が果たした役割

- 1) リベルタン文学の果たした役割
- 2) リベルタン版画の果たした役割
- 3) 批判と性と哲学
- 4) 「今、ここでの幸福」から社会批判
- 5) リベルタン文学はなぜ十八世紀フランスに生まれたのか？

## 結論